The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	当為評価のモダリティ(deonticmodality)を中心とした日本語とインドネシア語のモダリテイの対照研究
Author(s)	タタン, ハリリ
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58793
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	タタン・ハリリ
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲 第　６３　号
学位授与年月日	平成１８年３月２４日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	当為評価のモダリティ(deontic modality)を中心とした日本語とインドネシア語のモダリティの対照研究
論文審査委員	主 査　教 授　仁 田 義 雄
	副 査　教 授　小矢野 哲 夫
	副 査　教 授　三 原 健 一
	副 査　教 授　田野村 忠 温
	副 査　名誉教授　森 村 　 蕃

論文の内容要旨

本博士論文の題目は、「当為評価のモダリティ(deontic modality) を中心とした日本語とインドネシア語のモダリティの対照研究」である。本博士論文は、インドネシア語のモダリティ論への再考の結果として，日本語のモダリティ論に基づいた「新たなインドネシア語のモダリティ論」と、「日本語とインドネシア語の当為評価のモダリティの対照」という二部から成っている。第一部は，本博士論文の第二章及び第三章があたり、第二部は，第四章及び第五章があたる。

インドネシア語のモダリティについての研究は、日本語のそれほど盛んには行われていないため、従来の研究を再考し、日本語のモダリティ論に基づいた新たなインドネシア語のモダリティ論を提案する。また、日本語でのモダリティの研究は盛んに行われているとは言われるものの、他の個別言語との対照研究はあまり行われていないようなので、日本語とインドネシア語の当為評価のモダリティ（deontic modality）を対照することとした。

本博士論文の第二章においては、先行研究としてインドネシア語と日本語のモダリティ論をまとめて紹介する。インドネシア語については、ほとんど唯一の研究であるアルウィ(1992)を参考にし、日本語については、主に仁田(1989; 1991; 2000)、益岡(1991)、宮崎他(2002)などを参考にする。インドネシア語では、アルウィ(1992)が、西洋言語におけるモダリティ論を基にして、インドネシア語のモダリティをModalitas Intensional（意図のモダリティ)、Modalitas Epistemik（認識のモダリティ)、Modalitas Deontik（当為評価のモダリティ)、Modalitas Dinamik（動態のモダリティ）の四つのサブ・カテゴリに分けている。さらに、Modalitas Intensionalには、〈keinginan（願望)〉、〈harapan（希望)〉、〈ajakan & pembiaran（誘いかけや放任)〉、〈permintaan（依頼)〉という四種が属し、Modalitas Epistemik には、〈kemungkinan（可能)〉、〈keteramalan（推測)〉、〈keharusan（必然)〉、〈kepastian（確信)〉という四種が属している。Modalitas Deontik には〈izin（許可)〉と

〈perintah（命令）〉という二つのタイプが属し、Modalitas Dinamik（動態のモダリティ）には〈kemampuan（能力）〉が属する、というふうに分類している。また、それぞれのサブ・カテゴリに属する意味を表す形式は、〈命令〉を表す文法的な形式以外、全てが語彙的な形式であると述べている。このような語彙的な形式として、「*mengharapkan*（希望する）」などのような動詞（verba）や、「*akan*（～する）、*harus*（～なければならない）」などのような助動詞（verba pewatas）や、「*seharusnya*（～なければなんらない、～はずだ）、*barangkali*（だろう、かもしれない）」などのような副詞（adverbia）や、「*saya kira*（私は～と思う）、*saya ingin*（私は～したい）」などのような節（klausa）を区別している。それに対して、日本語については、仁田（1989; 1991; 2000）は、モダリティを大きく〈命題めあてのモダリティ〉と〈発話・伝達のモダリティ〉とに分けている。〈発話・伝達のモダリティ〉を〈発話機能のモダリティ〉と〈丁寧さ〉とに分け、さらに、〈発話機能のモダリティ〉を〈働きかけ〉、〈表出〉、〈述べ立て〉、〈問いかけ〉の四つに分けている。〈命題めあてのモダリティ〉は〈認識のモダリティ〉と〈当為評価のモダリティ〉とに分けられている。前者には、推量、蓋然性判断、徴候性判断、伝聞などが属し、後者には義務・必要性、許可、勧めなどが属する。また、モダリティ形式については、〈真正モダリティ形式〉、〈疑似モダリティ形式〉、〈近似形式〉という三つの形式が区別されている。

第三章においては、新たなインドネシア語のモダリティ論について述べる。日本語のモダリティ論に基づいたと言っても、全てが日本語と一致するわけではない。例えば、インドネシア語に〈丁寧さ〉や〈説明のモダリティ〉などが存在するか否かについては、詳しい検討が必要であると思われる。アルウィのモダリティ論と異なり、モダリティの下位的タイプについては、新たなインドネシア語のモダリティ論においては、モダリティを、まず大きく〈発話・伝達のモダリティ（Modalitas Penuturan-Penyampaian）〉と〈命題めあてのモダリティ（Modalitas berorientasi Proposisi）〉とに分ける。〈発話・伝達のモダリティ〉には、perintah（命令）、permohonan（依頼）、larangan（禁止）、ajakan（誘いかけ）、hasrat-keinginan（意志・希望）、harapan（願望）、pertanyaan（問いかけ）という七つの下位種が属する。それに対して、〈命題めあてのモダリティ〉を〈認識のモダリティ〉と〈当為評価のモダリティ〉とに分ける。〈認識のモダリティ〉には、dugaan（推量）、kemungkinan（蓋然性判断）、prediksi（徴候性判断）、kewajaran（必然性・当然性判断）、keyakinan（確信）、berita（伝聞）という六つが属する。〈当為評価のモダリティ〉には、izin（許可）、kewajiban（義務・必要性）、negasi izin（不許可）、および saran（勧め）が属する。また、モダリティ形式についても、アルウィが大雑把に挙げているのとは異なり、仁田（1989）を参考にしながら詳しく区別する。さらに、例文を分析しながらそれぞれに属する形式の意味を記述する。

第四章では、インドネシア語の〈当為評価のモダリティ〉についてより詳しく論述する。アルウィが指摘した Modalitas Deontik〈当為評価のモダリティ〉に属する izin（許可）を残留させるが、perintah（命令）を〈発話・伝達のモダリティ〉

に移動させる。代わりに、kewajiban（義務・必要性）、negasi izin（不許可）、saran（勧め）を入れ、izin（許可）を含めて、四つの下位種を属させる。さらに，それぞれの意味を表す形式に対して、文において位置移動の可能性のような形態的・統語的な特徴や、意味的な特徴、否定について分析する。

第五章では、本博士論文の中心テーマの一つである日本語とインドネシア語の〈当為評価のモダリティ〉の対照について論述する。インドネシア語では、モダリティ形式の形態的・統語的な側面や、モダリティ形式と否定との関係について、特徴を考察する。例えば、全ての形式は、文において位置を移動することができるし、また否定について、命題に対する否定やモダリティ形式に対する否定もほとんどの形式が可能である。一方、日本語では、モダリティ形式の意味的な特徴について詳しく考察する。そこから、両言語における〈当為評価のモダリティ〉についての共通点や相違点が分かる。

本博士論文は、上述した二部のほかに、第一章の序章と第六章の終章が加えられている。第一章の序章においては研究の背景・目的と方法や論文構成を述べ、第六章においては結論と今後の課題について述べる。

論文審査の結果の要旨

先行のインドネシア語のモダリティ研究としてまとまったものには，H. Alwi (1992) *Modalitas dalam Bahasa Indonesia*（『インドネシア語のモダリティ』）があるが，それ以後，インドネシア語のモダリティ研究は，さほど大きくは進展していない。当為評価(deontic)のモダリティを中心にしたものではあるが，インドネシア語のモダリティ研究としてかなりまとまった研究であることが，本論文の，まず評価できる点である。さらに言えば，重要な先行研究であるAlwi (1992)のモダリティ論に再考を促し，インドネシア語のモダリティ論への新しい１つの提案になりえている点が，本論文の重要な貢献の１つである。このことが可能になったのは，西洋言語学でのモダリティ研究にのみ依拠したAlwi の研究に対して，本論文が日本語でのモダリティ研究を十分考慮に入れ，西洋言語学におけるモダリティ研究にも配慮しながら，インドネシア語の言語現象をきめ細かく観察したことによる。特に，西洋言語学の伝統に接する機会はあるものの，日本における文法研究の進展を正確には知りえない，インドネシアの言語研究者が多い中で，日本における文法研究の進展に十分配慮しそれを取り入れながら，インドネシア語の分析・記述に立ち向かったことが，新しい視点を生み出しうる本論文全体の強みになっている。モダリティという研究領域は，日本語という言語の特徴もあって，日本語文法研究においては，研究が多く，世界的に見ても進んでいる研究領域であろうと思われる。

自らの分析・記述の基盤を形成するために必要になる基本的な先行研究が的確に取り出されて，要領よく押さえられている。そのことにより，克服すべき対象である Alwi のモダリティ論の問題点－個々のモダリティの下位的タイプの規定の明確化，各々のモダリティを担う形式の検討・整理，命令と当為評価との関係，

partikel(小辞)をも取り扱う必要性などーが明確に取り出されている。ただ，それらの問題点に十全に答えた段階にまで達していないところもあり，先行研究と同様の問題点を引きずっている箇所が散見しないわけではない。日本語のモダリティ研究に対しても，先行研究は簡潔ではあるが要領よくまとめられ紹介されている。ただ，日本語のモダリティについては，多様な研究があり，他の先行研究についても言及・目配りがもう少しあっても良かった。ただ，自らの分析・記述にとって必要な要点は押さえられた形にはなっている。

本論文の著者は，日本語のモダリティ研究における成果をインドネシア語の言語現象にあわせながら参照していき，インドネシア語のモダリティを，〈発話・伝達のモダリティ〉と〈命題めあてのモダリティ〉とにまず分け，さらに，複数のレベルでそれぞれの下位類化を試みている。本論文の提出する下位類化は，従来の研究を補訂するものになっている。もっとも，これらの下位類の存在は，十分に証明され切ったとは言えないし，この種の提案は，未だ試案の段階に止まりはしているものの，この種の体系的な下位類化そのものが新しいものであり，インドネシア語のモダリティの体系化への試みとしては，十分評価ができよう。また，インドネシア語のモダリティの表現形式についても新たな提案を行っている。従来の研究がある種の(本)動詞をモダリティ形式として扱っていたことに疑問を呈し，検討を加え，この種の取り扱いを批判している。本論文の立場・立論は首肯できるものである。さらに，本論文の提唱するモダリティの体系・下位類に従いながら，各種のモダリティについて，その規定づけ・特徴づけが行われた後，それらを実現する諸表現形式の取り出し，それら表現形式の位置づけ，使われ方などが，例文とともにかなり詳しく説明・提示されている。また，小辞をモダリティとの関連で取り出したことなどは，本論文の新しい提案であると言えよう。

特に当為評価のモダリティについては，日本語に対する研究を参考にしてはいるものの，従来の研究に対して，よりきめの細かい下位的タイプの設定，そしてそれらへの分析・記述を行っている。つまり，本論文が提案する種々の当為評価のモダリティについて，それを実現する表示形式(語彙的要素)の網羅的な取り出しを行い，文中でのそれらの出現位置のあり方，否定形式との共起関係の問題，さらに認識のモダリティの相互関係にも考察を及ぼし，認識のモダリティが当為評価のモダリティを包むあり方で現れることを示している。いずれも新しい試みである。

ただ，かなり困難なことではあるが，同一のモダリティを表すとされる，個々の語彙的要素の有する意味・用法の異同について，もう少し踏み込んだ議論があれば，本論文のモダリティ形式の取り出し・記述は，より確かなものとなっていたであろう。もっとも，この種の願望は過ぎたるものと言えるかもしれない。課題や残された問題はあるものの，本論文で提出された，これらの説明は，従来の研究の１つの対案になっているし，インドネシア語のモダリティの表現についての１つの小さな記述文法書になりえている，と言っていいだろう。

また，試案ではあるものの，インドネシア語に対しても，文を意味ー統語的構造の点から大きく２層に分けること，さらに，[発話・伝達のモダリティ [命題めあて

のモダリティ［テンス［肯否［アスペクト［ヴォイス］］］］］］，といった文法カテゴリの層状関係が，線状的な意味合いではなく，構造的なあり方で概略成り立つことを述べている点なども，従来には見られない新しい提案であろう。インドネシア語にもそれなりに層状構造が確認できれば，それは日本語学・日本語文法研究にとっても，役に立つ知見であり，この種の立場に対する１つのサポートにもなろう。

ただ残念なことに，日本語表現に誤りが散見する。もう少し正確にネイティブ・チェックを受けていれば，本論文はもう少し読みやすいものになっていたろう。

当然本論文にも，いくつかの問題点が存する。記述が概説的段階に止まり，議論の深まりに欠けるところもある。また，依拠している先行研究に偏りが見られる。ただ，これらの点は，本論文の著者のように，日本語教育・日本語学をインドネシア語でより良く講じるために，日本語と対照させながらインドネシア語を分析・記述するという目的にあっては，さほど大きな問題点にはならない。本論文が提示した記述は，インドネシアにおける日本語教育・日本語学の進展，さらに，インドネシア語のモダリティ研究への新たな１つの刺激になりえているものと判断される。

これらのことを総合的に判断し，本審査委員会は，本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。